

書 評

加藤 國安著

『越境する庾信——その軌跡と詩的表現』

稻 垣 裕 史

京都大學

北周の庾信といえ、杜甫に「暮年の詩賦 江關を動かす」(「詠懷古跡」五首、其一)とうたわれるごとく南北朝期の最後を飾る大物詩人であり、何よりも杜甫自身、晩年まで敬愛してやまなかった人物としてよく知られている。本書の著者、加藤國安氏が庾信に關心を抱くようになったのもやはり杜甫がきっかけであって、本書の「後記」にそのころの様子が回顧されている。それによると、著者が庾信の研究に着手したのは一九八〇年頃のことであった。当初はもっぱら倪璠の注釋を頼りに作品を読み進めていたのだ

が、倪璠の解釋には納得しがたい部分も多く、まもなく倪璠注とその「庾信年譜」に不満を抱くようになる。そして一九八三年、著者に轉機がおとずれる。

そうこうしているうち、『文史』一九輯(中華書局

一九八三)に載った魯同群氏の「庾信入北仕歷及其主要作品的寫作年代」という論文を偶然目にし、私が數年來ずっと疑問に思っていた問題について、すなわち庾信の諸作品の制作年代について、ことに「哀江南賦」を中心とする作品について、斬新な論を繰り廣げていることにとても驚嘆した。魯氏の解釋は、それまでの私の庾信論に關するもやもやを一掃するような、じつに明快なものだった。これによつて、私は自分の庾信論を根底からやり直す必要を感じたのである。

(二二五六頁)

魯同群氏のこの論文は、庾信の詩文の作成年代に關する論考であり、從來の倪璠の作品繫年を根本から問い直す畫期的なものであった。以來二十餘年にわたり、著者は「倪璠の「庾信年譜」と魯同群の新説をそばに置きながら、少し

ずつ作品を読み、また當時の時代背景を再構成し、庾信の人間關係を洗い出すという地道な作業」（二二五六頁）を續けてゆく。そのような長い研鑽の後に上梓されたのが、本書『越境する庾信——その軌跡と詩的表象』である。

既存の庾信像を打ち壊し、新しい庾信像をいかに再構築するか——本書のねらいはここにある。日本における庾信論の專著として最も早いものは興膳宏『望郷詩人 庾信』（『中國の詩人』四、一九八三年、集英社）であろう。著者は

興膳氏の著書について「從來の庾信理解の上に立って、北遷後、故郷の江南を追懷するすぐれた文學作品を數多く殘した詩人として取り上げた點」に特色があると一定の評価を與えているが、著者はこのような「從來の庾信理解」を根本から問い直そうとする。興膳氏の著書が出て以降、國の内外で庾信に關する專著は次第に數を増してゆく。日本國內におけるごく最近の成果としては、矢嶋美都子『庾信研究』（二〇〇〇年、明治書院）が挙げられるだろう。著者はこれら近年の研究書について、次のようにコメントしている。

これらの研究書を通して感ずるのは、庾信の生涯と作品について少しく共通理解が得られるようになってきたと思われる一方で、諸作品の細部まで踏み込んでいくと、たちまち大きな矛盾に突き当たってしまうということがある。その大きな矛盾とは、北周の明帝期以後、とりわけ武帝期になって始まる庾信と帝室との親密な關係についての理解が不十分なまま、この點をほとんど脇に置いた形で、庾信を亡國の怨みを抱いたまま異境に客死した愛國の士として捉えるという點である。夷夏をめぐる庾信の認識には、それがいつの時期かによって大きなギャップがあり、彼の諸作品相互においても心的な揺れがあるため、その生涯と作品の理解・評價が全く異なってしまうのである。（四頁）

つまり、北周朝における庾信の政治的立場をどのように解釋するかによって、庾信像は大きく變わってくるのである。北周における庾信は本當に「亡國の怨みを抱いたまま異境に客死した愛國の士」だったのか。このような從來の庾信像を見直すべく、著者は庾信の傳記で不明な部分、とりわ

け各官職への任官時期について綿密に考證し、庾信の傳記に明確な輪郭を與えてゆく。その作業を通じて、從來の固定的な庾信像を再構築しようというのである。

大部な論著であるから、まず目次を示そう。

序

第一部 梁朝の榮光期の庾信——言語美の越境者

第一章 梁朝の榮光の中で——侯景の亂前

第二章 雅のフラテーション——「春賦」論

第三章 鏡のテオリア——「鏡賦」論

第四章 ブドワールの明かり——「對燭賦」「燈賦」

論

第五章 邊境のイメージャリー——「蕩子賦」「昭

君辭應詔」「王昭君」論

第Ⅱ部 梁朝の滅亡——西魏期の庾信——祖國喪失の「羈

旅」の人

第一章 梁朝の社會矛盾の中の庾信

第二章 西魏下における庾信の抵抗

第三章 魏周易代期における庾信の轉回

第四章 「哀江南賦」論——その主題・構成および

制作年代

第五章 三部作における歴史描寫と天意論

第Ⅲ部 北周期の庾信——新たな生を開くディアスポラ

第一章 孝閔帝期の庾信——激しい權力闘争下の羈

旅の臣

第二章 明帝期の庾信——文學的交流の始まり

第三章 武帝期（保定年間）の庾信

第四章 武帝期（天和年間）の庾信

第五章 武帝期（建德年間）の庾信

附録

庾信年譜

北周官僚機構圖

命品、勳官、戎號圖

梁王室世系表

庾信關係地圖

後記

索引

本書は三部構成、計二十三篇の論考からなる。第Ⅰ部が一一八頁（七一—二四頁）、第Ⅱ部が三四三頁（二二五—四六七頁）、第Ⅲ部が七四八頁（四六九—一二六頁）と、部を追うごとに長大になってゆき、第Ⅲ部にいたっては實に本書の半分以上を占める。目次を見ればわかるとおり、本書は庾信の一生を時間軸にしたがつて追跡してゆき、各々の章・節のなかで、その時期の庾信が如何なる立場にあり、何を考え、どのような文學活動を展開したのか、詳細に論じてゆく。そういった一つ一つの論考が積み重なり、本書全體を通じて一つの新しい庾信像が提示されるのである。

これだけでは年譜の再構成で終わってしまうのだが、著者はさらに一步踏み込み、それぞれの時期において最も特徴的な作品に光を當て、作品論を展開してゆく。編年體を基調としつつも事實の整理に終始せず、庾信という文學者の内面にまで切り込み、同時に個別の作品の藝術性にまで論及する——このような本書の性格は、個々の論文の集積によつて描き出された庾信の「評傳」と概括できるかもしれない。『越境する庾信——その軌跡と詩的表象』という本

書のタイトルは、庾信の「軌跡」すなわち傳記を基礎としつつ、作品論を通じて「詩的表象」に接近してゆく本書の性格を端的に言い表している。

(a) 「軌跡」の再構成

それでは、著者は庾信の「軌跡」をどのように再構成したのだろうか。從來の説との最も大きな違いは、さきにも紹介したとおり北周の明帝・武帝期における庾信の位置づけの仕方にある。より具體的にいえば、次の二點に集約されるだろう。ひとつは、「哀江南賦」「擬連珠」「擬詠懷詩」などの、「望郷」「愛國」の形象と密接に関わる作品群をいづごろの作として繫年するか。もうひとつは、北周における庾信の任官時期をどのように設定するかである。

「哀江南賦」「擬連珠」「擬詠懷詩」の三作を、著者は「三部作」と呼稱しているが、これら三部作のなかでも特に注目されるのは、やはり代表作である「哀江南賦」であろう。「哀江南賦」の制作年代は、主として「哀江南賦」論——その主題・構成および制作年代（第Ⅱ部第四章）のな

かで論じられる。この一章は著者の一九九一年の論文に加筆したものであり、本書のなかでもとりわけ重要な一篇である。「哀江南賦」の作成年代について、これまで定説とされてきたのは陳寅恪の説であり、彼はこの賦を庾信晩年の作とした。陳寅恪の説に異を唱えたのは冒頭でも紹介した魯同群氏である。魯氏は實證的な方法を用いて新しい可能性を示し、北周の孝閔帝期、五五七年十二月、庾信四十五歳の作に比定した（「庾信入北仕歷及其主要作品的寫作年代」）。つまり、この賦の作成年を通説よりかなり早い時期に設定したのである。著者は魯同群の説に依りつつ補足的な考證を加え、魯説よりも若干早い、宇文護によつて孝閔帝が弑された直後の五五七年十月に比定している（四九八頁）。なお、「哀江南賦」の年代考證に関する先行研究の要點とその問題點については、「哀江南賦」に関する問題點」（第Ⅱ部第一章第八節）により簡潔にまとめられている。

作成年代に關する著者の綿密な考證はもとより説得力に富む。ただ評者の個人的な感想から言えば、考證よりもむしろ著者の鋭い直感力のほうに魅力を感じた。著者は陳寅

恪の晩年説に對して次のような疑問を抱く。「このような時期になつて果たしてこれほどの悲憤慷慨調のかつ嚴密な構成を有する長編敘事詩を執筆しえたのだらうか。」（三五頁）と。この指摘は、「哀江南賦」の作成年代を引き上げるだけの力を秘めているように思う。白居易が政治的氣概に満ちた諷諫詩の制作を晩年にはやめて閑適詩におもむいたのはよく知られた話であるし、そうでなくても體力も衰えた晩年、梁の滅亡から何年も経つた後で、あらためて梁朝の政治史を長篇の辭賦として描くのに相當の氣力が必要であらう。ある作品が作られるのに最もふさわしい時期はいつなのか。そういった作家と作品の微妙な關係について證據を挙げながら説明するのは難しいけれども、著者の懷疑には長い時間をかけて作品に接してきた者だけが持ちうる見識の鋭さがうかがえ、反芻すればするほどともつともであるように思えてくる。

北周における任官時期については、倪璠の舊説が明帝のころと考えているのに對し、著者はこれよりも遅い武帝期であつたとする。任官時期についての考證はいささか煩瑣

であり、ここで詳しく紹介するには及ばないが、評者がとりわけ興味を持ったのは、北周朝が實施した梁朝の舊臣に對する優遇政策について言及した箇所だ。著者は舊梁朝の宗族たちの任官が武帝期によりやく始まることに注目し、庾信が彼らに先んじて明帝期に任官されるのは不自然である」と指摘する。そして庾信も他の舊臣たちと同様、武帝期に實際の官職に就いたのだと論じている（第Ⅲ部第三章（2）第一節）。ある人物の任官時期を比定するとき、まずは史書や別集から本人に直接關係する記事を拾い集める必要があるが、著者は史料の整合性のみに汲々とせず、政治史というより大きなフィールドにおいて庾信の任官時期を考えようとしている。個々人を政治史のなかで捉えようとする態度は、本書の大きな特色であるといつてよい。とりわけ第Ⅲ部は庾信論と北周の政治史に關する論考とが相半ばしており、第Ⅲ部だけで本書の半分以上を占めるのはこのためである。孝閔帝・明帝・武帝と續く北周朝の影の實力者であつた宇文護をめぐる政治史のなかで、庾信は何を考え、どのような詩文を残したのか。「日中雙方の學界で

まだほとんど解明されていない」（四七一頁）宇文護の政治史における役割について詳しく論ずる本書は、史學の領域にも大いに資するところがあるだろう。

このような作成年代と任官時期の再考を通じ、從來の庾信像がどのように解體され、どのように再構築されたのか、ここで評者なりに要約してみよう。まず從來の固定的な庾信像といえ、北朝に拘留されたまま梁の滅亡に遭い、心ならずも北朝へ出仕し、表面上は從順な態度を取りつつも本心では北朝に服從せず、晩年まで江南への歸還を願つてやまない羈旅の臣、といったところであつた。これに對して本書全體を通じて再構成される庾信像は、おおむね次のようにまとめられる。すなわち、北朝に拘留され梁の滅亡した當初、歸順を斷固として拒否し怨恨の炎を燃やしていた庾信は、宇文泰との接觸を契機として次第に心を開いてゆく。その後宇文護が實權を握り、庾信は依然として出仕をためらっていたが、それは政情不安のためであつて、北周に怨恨を抱いていたからではない。武帝期、梁の舊臣への優遇措置が相次いで實施され、このころ庾信も正式な官

職に就く。それ以降の庾信は江南への思いは絶ち難かったとはいえ、北周朝のために實直に職務をこなし、充實した晩年を迎えたのであった。——このように、庾信を「羈旅の臣」として位置づけるのは舊説と同じであるが、晩年まで北朝に心を開かなかつたという形象は明確に否定されている。作成年代や任官時期に關する見解が倪璠や陳寅恪らの説と大きく食い違うため、それをもとに再構成される庾信の傳記、そして傳記をもとに再描畫された庾信像もおのずから姿を異にするわけである。舊説を批判的に検討して庾信の傳記をあたらしく描きなおした人物は、日本においては著者をおいて他になく、本書の最大の意義はここにある。

とはいえ、評者にはいまだ不満も残る。著者もまた舊説と同様、ある時期の庾信を「愛國」主義者と見なしているからだ。たしかに著者は、「從來の定説とされてきた愛國望郷の詩人庾信という理解の仕方には、少しく問題のあることが分かつてきた」（三頁）と、從來型の「愛國望郷の詩人庾信」という形象に對して批判的ではある。ところが、

北遷直後の庾信については、著者は依然として忠君愛國者として論じている。

してみると、「哀江南賦」のそれも、亡國直後の梁民すべてが共有していた民族的・國家的な祖國への激しい思慕の情、すなわち愛國心と切實に結び付いたものと考えられる。（三七六頁）

庾信のこうした望郷の情は、從來までは南北交流の行われた武帝の保定二（五六二）年、同建德四（五七五）年の頃に高まりを見せたと考えられてきた。ただあまり言われないが、庾信が西魏に移って間もなくの頃もまた、そうした望郷の思いが愛國の情と相まわってきわめて強かつた時期だったことは、これも既述した所である（「哀江南賦」論）。（五二七頁）

著者は一方で「民族的・國家的な祖國への激しい思慕の情、すなわち愛國心」といい、一方では「望郷の思いが愛國の情と相まわってきわめて強かつた」と述べ、祖國喪失の悲しみと「愛國」との區別を曖昧に論じているが、兩者はふたつの異なる概念である。たとえば『史記』に記載される

「麥秀歌」が箕子の作だとして、これを「愛國」の文學と呼びうるだろうか。祖國喪失を悼む、いわば「悼國」の文學でありえたとしても、「愛國」の文學とは見なせないのではないか。

「愛國」主義を庾信の文學に持ち込まざるを得ないのは、北朝に對する怨恨を積極的に認めているからだ。亡國の悲しみを「亡國の恨み」（五六三頁）として読み替え、それをさらに復讐心として読み替えるからこそ、愛國主義者庾信の形象が出来上がる。果たして庾信の文學にはそのような怨恨が見出せるのだろうか。「西魏下における庾信の抵抗」（第Ⅱ部第二章）と題する一章では、つぎのように述べられている。

筆者の見る所では、庾信は最晩年に至るまで癒しがたい望郷心とともに、周粟^{しゅうりゅう}を食む負い目を忘れ去ることはなかったが、一方やがて北周の高官として帝室より絶大な信頼を忝なくし、晩年はかなり恵まれた環境の中で比較的平穩な状態にあったように思われる。庾信が精神的・肉體的に苦境に追いこまれ、ルサンチマ

ンの炎を燃していたのは最晩年ではなく、むしろ北遷した直後の五五四年秋より五五六年西魏に出仕する頃までの、およそ三年間のことだったように思われる。

この期間内に庾信は梁朝より北朝の高官へと急轉回しているのであり、これに伴う激しい葛藤こそ庾信の文學を實りあるものにした要因だったと考えられる。

（二二一頁）

晩年の庾信に北朝への怨恨はなかったとする説は大いに支持したいが、北遷直後の庾信に「ルサンチマンの炎」を積極的に読み取る立場には賛同することができない。なぜなら、本書に引用される庾信の詩文は、いずれも必ずしも「ルサンチマン」——怨恨や復讐心を想定しなくても讀めるからだ。

たとえば、庾信の「西魏への出仕を斷固拒否し、いつか梁を復興させたいという強い氣概」（二三〇頁）を明確にあらわした作品として、著者は「張侍中の述懷に和す」詩を挙げている。この詩のむすびは次のとおりである（詩の譯文は本書から引用、以下同じ）。

且悦善人交

無疑朋有數

何時得雲雨

復見翔寥廓

貴卿と 善意のこもった／親交があるならば／友の數

など 問題ではない

何れの日か よい時期を得て／我が志しを 大空に

はばたかせん

これに對する著者のコメントは次のようなものだ。

張侍中との異境での交わりを喜び、たとえ少數でも

歸順を拒否しともに隱者として志を貫こう、そして

「何れの時か 雲雨を得て／復た寥廓に翔けるを見

ん」と、ひそかな決意で結ぶのである。これは思うに、

梁の復興をいつの日か果たさんとの熱い思いを述べた

ものであろう。西魏へのかたくなな抵抗、それが入北

直後の庾信の姿勢だったのである。(二二五頁)

たしかに末尾の一聯は著者のいうように「梁の復興」を意

圖していると考えることもできようが(倪璠の注はまさにこ

の説である)、この詩は張侍中への唱和詩であるから、自分

と同様に仕を拒む張侍中への同情と慰めに重きが置かれ

ている。いつかまた雲に乗って大空に飛翔できる日が来る

だろうか、という結びであり、そこには江南へ戻りたいと

いう願望を読み取ることはできる。しかし、そのような願

望は「梁を復興させたい」という強い氣概に直接的には結

びつかない。著者はその後の論考においても、「宇文泰の

要請を拒否した庾信は、西魏の權力に屈さず、かの祿を食

まず、……ひそかに梁室の復興をうかがい、時來たらば立

たとと考えていたようだ」(二四三頁)、「祖國への歸還と祖

國の復興を強く願ったのは、「死樹」「枯樹」同然と化して

いた西魏末に北周初のこと」(三八五頁)と、庾信の梁朝復

興に對する願望に再三言及している。そして別の箇所では

その願望を「周粟を食む」ことを悲嘆し、この新しい狀

況にかたくなに心を閉ざし、西魏との鬭争を考えたり、ま

た抵抗としての隱棲を選ぼうとした」(二八八頁)と、「西

魏との鬭争」という、より強いことばで言い換えている。

しかし、本書を通讀するかぎり庾信が梁朝復興への願いを

抱き、西魏との鬭争を考えたとする具體的な根據は、上に引いた唱和詩「何れの時か 雲雨を得て／復た寥廓に翔けるを見ん」のほかには擧げられていない。

たしかに「哀江南賦」の一部分や「擬連珠」「擬詠懷詩」などには、庾信の他の詩賦には見られない、きわめて強い語氣がみとめられるから、それを怨嗟と呼ぶなら呼べなくもない。例えば「哀江南賦」には、

熾火兮焚旗

貞風兮害蠱

乃使玉軸揚灰

龍文折柱

激しい火が／梁の軍旗を焼き／貞しき風が／害毒を滅ぼした／かくて 元帝の集めた／萬卷の書を 灰とならしめ／帝の名劍 龍文りゅうもんをして／柱に打ちつけさせたのだ

という一節がある。これは梁の元帝の死について述べた箇所であるが、庾信が元帝に對して「貞風 蠱を害す」、すなわち「歴史の貞しい裁きを受けて滅びる運命にあった」

(四四一頁)との評價を下していたとすれば、きわめて手厳しいと言わざるを得ない。しかし、「哀江南賦」には梁の武帝や元帝に對する批判的態度は見いだせても、北朝に對する怨恨は讀み取れない。よしんばその筆端に怨嗟があらわれていたとしても、それは南朝の元帝に對してであつて、北朝に對してではない。

つまり、庾信が北朝に對して怨嗟を持っていたとする根據はきわめて薄弱なのである。後代、一部の人々から庾信が北朝に批判的な「愛國主義者」として認識されるのは(そういつた見方が流行するのは中國文學史のなかでもある一定の時期に限定されるだろうが)、庾信に北朝への出仕を拒絶する詩賦があり、また江南への思いを屢々として述べた詩賦があるためであつて、實際に北朝への怨嗟をストレートに表現した作品が残っているためではないのだ。

節義の問題も同様である。庾信が節義の問題で苦惱したのは確かだろうが、これも北周への怨嗟や復讐心には直結しない。たとえば、漢の蘇武をめぐる逸話から、我々は頑として敵に降伏しない彼の節義を讀み取ることではできても、

匈奴への積極的な復讐心を讀み取ることは難しいであろう。庾信がある時期に遵守しようとしたのは人臣としての節義なのであって、それは祖國を滅ぼした北朝に是が非でも復讐しようという民族意識や愛國心とは區別されるべきだ。

そもそも、當時の北朝の士人たちは庾信の作品に「怨嗟」や「愛國心」をみとめていたのであるうか。もし北朝への怨嗟がにじみ出ていたとするなら、それらが北朝で編纂された庾信の別集に收められているのはどういうわけだろう。よく知られるように現存する庾信の詩文の大半は北朝期の作であり、北朝期の作品は彼の生前に別集にまとめられている。よしんば往年の庾信に北朝への怨嗟を直接的にあらわした詩賦があつたにしても、そのような詩賦が北朝において別集に入れられるとは考えにくい。「怨嗟」という庾信の實作に直接見られない要素を假想しないで彼の人物像を再構成することはできないのだろうか。以上が著者の論に對する評者の偽らざる感想である。

(b) 「詩的表象」に關する議論

つぎに、本書のもうひとつの特徴である「詩的表象」について觸れておきたい。作品の生まれた政治的・文化的背景を史料の綿密な考證にもとづいて細部まで復元する作業は、中國文學研究という場において必須である。文學者の傳記は政治史と密接に關わっており、政治史の文脈を無視して文學作品を論じたとしても、もはや讀者は納得しない。しかし、想像力を刺激する斬新な作品論を求める讀者にとつては、政治史からの讀み解きだけでは物足りなさを感じる場合もある。著者の「詩的表象」をめぐる議論、なかでも宮體詩賦に關する論考は、このような相反する讀者の要求を同時に満たしてくれる。

庾信の作つた賦のなかには宮體詩に似た風格を持つものがある。著者はこれらを「宮體賦」(五八頁)と名付けている。周知のごとく、梁武帝の中大通三(五三二)年、晉安王蕭綱は昭明太子の急逝にともない新たに太子の座に就き、宮體詩の推進を圖る。この宮體詩の流行について、從來は

蕭綱が兄昭明太子の謹嚴な文學觀と差別化を測るため、既存の文學界の潮流を變革すべく宮體詩を推進したのだと説明してきた。しかし蕭綱個人の文學的志向に重きを置く従来の説では、文學史上にきわめて顯著なこの宮體詩の流行という現象を十分に説明することができない。そこで著者は、宮體詩の生まれた必然性について政治史の文脈から論理的に説明しようと試みる。

徐摛らによって始められた宮體詩に對し、當初梁の武帝は社會風紀への影響を懸念していた。奢侈を嗜好する當時の社會的風潮のもとでは、艷情の詩は風紀の惡化に拍車をかけかねないからだ。にもかかわらず宮體詩が推進されたのはなぜか。著者の見解はつぎのとおりである。下層士人が經濟面において實力をつけてきた當時、下層士人と上層貴族が團結して皇室の中央集權體制を動搖させる恐れがあった。彼らの團結を未然に防ぐため、皇室は士人・貴族との連繫をあらためて確認し、強化しておく必要がある。そのような政治的配慮のもと、宮體詩は皇帝と士人・貴族を繋ぐ紐帶として、すなわち彼らの「連帶感の政治的シンボ

ル」(二八頁)として、機能するようになる。齊・梁期に啓が多く作られるのもこの「皇室貴族」の主従關係強化に關連があると、著者は別の箇所で指摘している。(六一二頁)

以上に紹介した宮體詩流行についての考察は、いわば文學史上のある現象を社會的背景から「外的」に説明したものであるが、著者は宮體詩の流行を政治の力學だけで説明しようとはしない。このような「外的要素」と平行して、宮體詩それ自體に流行をおこさせるような「内的要素」があるのではないかと考える。現在、宮體詩については詩律・聲律からの分析、民間歌謠との比較、佛教文學からの影響など、さまざまな方面から研究が進められているが、いまだ「肝心の文學作品そのものとしての宮體詩の魅力・評價に關する研究」は貧弱であるという(二六頁)。宮體詩そのものに内在する、流行を必然にした内的な要素、すなわち「宮體詩の文學的內實」(同上)を把握するため、著者は作品論を展開してゆくのである。

「フラテーション」、「テオリア」、「ブドワール」、「イ

メージャリー——「望郷詩人」庾信について語るとき、このような西洋由來の概念を大膽に用いた論著が、かつてあったらうか。上下卷一二〇頁という破格のボリュームもさることながら、本書を繙いてまず驚かされるのは、王朝交代期という政治色のきわめて濃厚な時代を生きた庾信の詩賦を、抒情的な文藝作品として批評しようとするその斬新な態度である。そのなかでも最も重要な論考のひとつが、次に紹介する「鏡賦」論（第I部第三章）だ。

著者はまず、鏡を詠じた詩賦が梁代に盛んに作られたことを確認するため、庾信に先立つ梁の詩人の「詠鏡」詩を紹介する。「詠鏡」詩の流行が詠物詩の發展と密接に係わることはもはや言うまでもないだろう。たとえば高爽の詩は、

言照長相守

不照長相思

（榮光の日々には）わが身を 鏡に映し／ずつと一途に
守ってきた／恩寵が 遠のくようになってからは／映
すことも なくなつたけれど／でも變わらずに お慕

いしてきたわ

とあるように、閨怨詩である。何遜の詩は、

聊爲出繭眉

試染天桃色

生まれたばかりの／みずみずしい 眉をかき／取れた
ての桃の／若々しい 頬紅をぬってみる

のように鏡に向かつて化粧する女性の様子を描いているが、

末尾に

蕩子行未歸

啼粧坐相憶

ああ あの夫は／行つたきり まだ歸つてこない／せ
つかくの お化粧も／涙まじりに なつてしまつて／
今頃 あの夫／どうしてるかしら

とあることからやはり閨怨詩である。つづく朱超道の詩も

安釵釧獨響

刷鬢袖俱移

唯余心裏恨

影中恒不知

釵かんざしも プレスレットも／こんな感じで いいわ／よく音が 響くみたい／鬢の具合や 袖の具合も／大丈夫のよう／さあ 一緒に 移動しましょう

ところで 鏡の中の影さん／あなたは いつもご存じないようね／私の心の奥の 秘めた恨みを

と、やはり同種の趣向である。女性の身支度の様子を巧みに描いた梁代の「詠鏡」詩を概観したあと、著者はつぎのように述べている。

このように宮女らは、眉・頬・かんざし・鬢・袖といった具合に、鏡の中の自分のあれこれに美を探索するようになる。それはまた人（ここでは主に貴顕——原注）に見られているという、他者の眼差しに對する強い自意識を促す。（五七頁）

ここで「自意識」という言葉がでてくる。宮女は鏡という道具に向かい合うとき、同時にふたつの経験をやる。ひとつは、美しく飾られた自分に見とれる自己陶酔的な経験であり、もうひとつは自分の鏡像という「他者」に見つめられる経験である。とりわけ「他者」から見つめられるとい

う経験は、自分が他人からどう思われているかという「自意識」を宮女に促すと、著者は論じている。

宮女からすれば顯貴らの視線は、自らの薄い皮膚をはぎとり現實をむき出しにする恐怖の刃にほかならない。そのような鋭利な眼光を向けられるや、宮女は狼狽し身を隠蔽しようとする衝動に驅られる。この窮状を解決するには、ますます鏡に向かわねばならないのである。かくて明るい鏡面からは、失望感や陶酔感、羞恥心や自負心などの入り交じったさまざまな溜息や心情が吐露されてくる。また當時の鏡は、金屬製だから少し「故物」になると、くもりを生じやすい。それは詩の隱喩としては、容貌の衰えと恩寵の途絶えなどを暗示する含みのあるものとなる。このような素材は宮廷詩人らに格好の話題を提供するようになり、こうして梁代に、鏡に向かう宮女の様子を描いた詩句が著しく増えるようになっていったと考えられる。（同前）

庾信の「鏡賦」も梁代の他の詩人と同様、宮女の身支度の様子を細やかに描いている。

量髻鬢之長短

度安化之相去

懸媚子於搔頭

拭釵梁於粉絮

髻や鬢が 長いか短いか／あれこれ 氣になるわ／お

花の位置は いいかしら／離れ具合は どうかしら

かんざしには かわいい／飾りを付けましょう／その

軸の芯は 化粧綿で／きれいに ぬぐいましょう

著者のコメントは次のとおり。

宮女は「髻鬢の長短」や花飾りの位置關係などを氣にし、いろいろ手直しに餘念がない。「媚子…、釵梁…」の二句は難しいが、かんざしに付ける飾りを何にするかでひと苦勞し、あげくはかんざしの軸の棒まで、化粧綿でぬぐうほどの念の入れようであることをいう。化粧もここまでくるといささか度が過ぎるが、じつはその過剰な美意識にこそ興趣を見いだしているのである。(七二頁)

男性貴族たちは、彼女たちの装いが手の込んだものであれ

ばあるほど、そこに美意識を感じる。したがって、宮女たちは鏡のなかの自分に見つめられるだけでなく、男性貴族らの好奇の視線をもあつめていえるといえる。このような外部から自己へと向かってくる視線に氣付くこと、これを著者は「眼の新しい經驗」(七三頁)と名付けている。

以上の著者の説を少し整理してみよう。寵愛を失い顧みられなくなった女性の悲しみをうたった詩歌は古くから存在したが、そのような悲しみを文學的關心事として大きくとりあげたのが當時の梁朝の貴族であった。梁代に「愛を喪失した女性の美に對する美意識が急速に進展した」(八二頁)のは、鏡という道具に大いに關連する。鏡に向かうことで、人は自分を見つめる「他者」を意識し、さらにはその「他者」を外から眺めるもうひとりの自分の存在について意識せざるを得ない。このような人の意識の分化、すなわち「新しい眼の經驗」がおこると、男性はその分節化の進んだ高度な意識を満足させるために多面的な美を女性に求め、一方の女性はその要求に應うるべくますます多様に飾り立てる。こうして男性貴族の間では「愛を喪失した

女性の美」に對する興趣が盛んになっていくのである。著者自身はつぎのようにまとめている。

鏡像という虚構を介することで、女性美が畫期的に豊かに捉えられることになったということは、中國詩歌史上、身體のナルシズムを前面に押し出した「鏡のテオーリア（觀照）」が、はじめて確立したことを意味する。（八一頁）

さて、宮女の仕草を巧みに描いた宮體詩の行間に、梁代の詩人の洗練された言語感覺を読み取り、ひいては人間の「自意識」や「觀照」の能力にまで接近してゆく著者の論考は讀者の知的好奇心をくすぐつてやまない。しかし、率直な感想をいえば評者には理解しがたいところがいくつかあった。

まず、鏡自體は古くからあるのに、なぜ梁代にとくに意識の分化が進み、人間の「自意識」が芽生えたのか。「詠鏡」詩の流行と鏡を通じた「自意識」の覺醒とを結びつけるその着想は面白いが、實際には兩者の間には「鏡」という共通項しかない。梁代における鏡の特殊性について十分

に論じなければ、「自意識」の覺醒や「新しい眼の經驗」をこの時期特有の現象として位置付けることはできないのではないか。

つぎに、著者は「身體のナルシズムを前面に押し出した「鏡のテオーリア（觀照）」というけれども、自らの姿を自己陶酔的に眺める「ナルシズム」的態度と、自らを冷靜に客體化して見つめる「觀照」の態度とは、評者には全く別のありように思われる。過剰な「自意識」にはしばしば自己陶酔が含まれる。宮廷詩人たちはそのような「自意識」に目覺めた宮女に「美意識」を感じ、彼女たちの仕草や心情を巧みに描いたというのが著者の議論であつた。

その議論のなかには、宮廷詩人たちが鏡を通じて自己を「觀照」したとは論じられていない。鏡に向かつて自己を「觀照」しうるとすれば宮女自身であろうけれども、彼女らは自己陶酔的な「自意識」を持った人物として描かれるのみである。ここに論理のすり替えがある。著者は、自己陶酔を含んだ視野の狭い「自意識」と、自我とは何かを問う觀照の態度とを等置して、その兩者をひとつの「自意

識」という言葉で論じてはいないだろうか。

本書において「自意識」は庾信の文學の本質に關わる概念として用いられている。それは「鏡賦」論の以下の箇所からも分かる。

この種の鋭敏な自意識の伸長こそは、じつは後年の庾信文學の根幹となるものだったという點である。つまり、「枯樹賦」「擬詠懷詩」「擬連珠」などに見られる、あの過剰な自意識の表現の深い根は、じつはこの鏡の文學と深く關連するものである。(同前)

著者は「枯樹賦」「擬詠懷詩」「擬連珠」などの詩賦を、庾信が西魏への「北遷」を経験して間もない頃の作としている。當時の庾信は西魏に出仕すべきか否か苦悶していた。そのころの作品のひとつ「小園賦」について、著者は次のように論じている。

庾信の意識の中では、……しだいに天命の西魏への移行を認識するようになったと考えられる。が、このような解釋が己の無節操の糊塗に墮することを、當の庾信が氣づかぬわけもない。されば、己の中の欺瞞を

しながら江南時代の鏡の自意識のように問い、さらに苦惱の底に沈潜していったもののごとくに思われる。

(二七七頁)

出仕か否かをめぐって周圍の視線を氣にする心理状態は、宮女の「自意識」と共通點があるとしてもよいだろう。しかし、そのような宮女的な「自意識」は、著者の論考のなかでしだいに自己の觀照へとすり替えられていく。梁朝史の敘述と自傳的敘述のふたつの側面を持つ「哀江南賦」について、著者は次のように述べている。

動亂の中で己の據るべき基盤を根こそぎ喪失した庾信の狀況を考えた時、彼が心の中で梁朝の盛衰における自己を再確認し、それを通して今後の自身の可能性を探るのは當然のことである。庾信は時に絶望感や屈辱感に襲われながらも、あらゆる物が堰を切って流動化する情勢下で自己を見失わぬために、いな、もつと冷靜に自己を見つめるためにも、この「哀江南賦」を執筆しなければならなかったことだろう。すなわち、「哀江南賦」を綴ることは、取りも直さず自己の新た

な方向の模索の上でも、不可欠な意味を持っていたと
考えられるのである。(二九八頁)

著者の説によれば、庾信は時代の流れと自己のあり方を冷静に見つめるために「哀江南賦」を構想したことになる。
續けていう。

庾信のこの深い自己凝視の姿勢は、「鏡賦」の考察
の所でも指摘したように、當時にあつては稀なほど強
いと感じられる。それは、北朝に移つて後の庾信の
「知余」表現に至るまで、彼の自意識のかつた表現行
爲として一貫していくものである。(同前)

上に引いた一段では、自己を冷静に見つめる「自己凝視の
姿勢」が、「鏡賦」論の「自意識」のほぼ同義語として用
いられているのが見て取れるであらう。しかし、もし「哀
江南賦」を作つた頃の庾信に、自己を時代との位相におい
て捉える冷静な視座が備わっていたとするなら、當時の彼
はすでに自己陶醉的な視野の狭い「自意識」から脱却し、
冷静に自己を「觀照」できる境地に達していたのではない
か。評者には庾信の詩賦にそこまでの高い精神性を讀み取

る力はない。ただ、著者の論考を讀むかぎりではそのよう
に理解する方が妥當なように感じられた。

さらに、著者は鏡を詠じた詩賦を、庾信の作、他者の作
ともに女性の一人稱として譯出している。青年期の庾信に
は「婦女の立場」に立つたものが多いと著者は指摘してい
るが(一〇四頁)、女性にまつわる詩歌を一人稱として取り
扱うのには慎重を要するのではないか。確かに「妾心日已
亂、秋風鳴細枝」(庾信「度關山」詩、本書一〇七頁)のよう
に「妾」という語が用いられる場合は女性の一人稱として
理解することもできよう。では、「鏡賦」の次の一節はど
うか。

暫設粧奩、還抽鏡匣。競學生情、爭憐今世。鬢齊故略、
眉平猶刺。

この部分の著者の譯と解説は以下の通りである。

【譯】しばらく化粧箱を置き／また鏡臺の引き出し
を開けて(お化粧に精を出さなければ)／さあ 生きざ
まを 學びましょう／今の世相を 大切にしましょう
／負けてなんか いられないわ／鬢は きれいにそろ

えて／＼とのえなければ／眉も たいらにして／きち
んと 剃らなければ

【解説】宮女らにとつて、愛とは安らぎではない。激
しい闘いだつた。勇氣をもつて争うべきときは争わね
ばならない。庾信は、そんな異常な闘争心を、

競い學ばん 生情を

争い憐まん 今世を

と詠んでみせた。梁朝の宮廷詩は愛の獲得に燃え、ま
たその喪失を絶えず恐れる、宮女の繊細な心をくり返
し描出したが、その中でも庾信のこの表現は、愛の勝
敗に命を賭ける宮女らの胸の内をえぐり取つた、じつ
に生々しいものである。(七〇頁)

評者から見れば、上に引いた「鏡賦」の一節は女性の獨白
としなくとも、文字通り宮廷詩人が女性の化粧を外側から
「賦した」ものとして理解できるし、「競學生情、争憐今
世」の二句は生々しさよりも、むしろ通俗的な情緒を描い
ているのではないかと思う。

女性の一人稱で詩賦が譯され、それに對する著者のコメ

ントも抒情的で熱がこもっているため、著者の論考からは
閨房の女性たちに非常な同情を寄せ、女性になりきつて詩
賦を作る庾信の姿が思い浮かんでくる。著者は「對燭賦」
「燈賦」論(第I部第四章)において、ほの暗い明かりに
照らされる燭臺を「そのときまさに魅惑のオブジェといつ
た表情を見せる」(八九頁)と評し、當時は高級品であつた
燈油について「まさに豪華なロマンを演出する」(九〇頁)
と論ずる。もしびの前にたたずむ女性については、

この火の優しさ、切なさ。……女性は、ただささや
かな燃焼となり純粹な思いとなることで、自らの愛を
具現しようと欲しているようだ。夜明けの後には、長
い時を堪え忍ぶ妻のもの憂い時が待っているのだから
――庾信は、そんな女性の視線でこの賦をつづっている
のである。(九五頁)

のようにコメントしている。しかし、當時社交の場におい
て流行した、遊戲的要素のきわめて強い宮體詩に、このよ
うなロマンチックな自己陶醉をどこまで読み取れるのか評
者には疑問である。

庾信は冷静な觀察者だったのか、それとも過剰な自己陶醉者だったのか。評者は、詩賦を自律的な存在として扱い、内的構造を分析するという方法論は、現在もなお有効であると考えている。文藝批評の場をもたない中國文學研究の場においてこのような試みがなされたことは評價されるべきであるし、著者自身、現今の學界の傾向を承知した上で、あえてこのような方法を採用しているであろうことは容易に推察される。著者は庾信の文學を、政治の力學や史書の記述などから外的に説明するだけでなく、その内的な魅力を發掘して積極的に評價しようとする。史料面からの實證と作品の鑑賞とを交互に繰り返し、庾信の「實像」を明らかにしようというのが本書の目的である。しかし、時としてふたつの方法論が互いに衝突しあい、おのおのの投影によって映し出されるはずの庾信像がひとつの像を結ばない場合があるように、評者には感じられた。

以上、本書の持つふたつの側面——「軌跡」と「詩的表象」について、評者の個人的な興味にもとづいて感想を述べ

させてもらった。一二〇〇頁にもわたる大著を限られた紙幅のなかで紹介するにはおのずと限界がある。庾信と司馬遷の關係、「唱和空間」（第Ⅲ部第五章（二）第四節）を想定した實驗的な讀解、庾信の墓碑文をどのように位置付けるか、などは、本書の特徴として當然取り上げるべきであるけれども、遺憾ながら紹介しきれない。著者は庾信の別集と關連史料に長い年月をかけて向かい合い、本書において全くあたらしい庾信像を獨力で描ききった。その庾信像は史料のみから歸納されたのでも、文學作品だけから歸納されたものでもない。もし「實像」というものがあるとするれば、著者の提示した庾信像はイメージ先行型の從來の庾信像を確實に乗り越え、「實像」に向かって確かな一歩を踏み出したと評價せねばなるまい。あたらしい庾信像は提出された。つぎに現れてくる庾信はどのような姿をしているのだろうか。

（二〇〇四年九月、研文出版、一二六四頁）